

## 令和3年度 保育所実習

保育所実習担当 伊藤 昭博・大元 千種・木戸 貴弘・菅原 航平  
谷川 友美・中山 正剛・米持 広美  
山本 裕一（令和2年度）・助安 明美（令和3年度）

令和3年の保育実習は、保育所実習Ⅰ(保育所)を1年次2月に、保育実習Ⅱを2年次の8月下旬と9月上旬の2期に分けて、県内外の公立保育所・私立保育園・認定こども園にて実施した。

実習に向けて2年間実習指導を行った。1年次では、保育所実習Ⅰ(保育所)の事前指導として、実習の意義・目的・内容の理解、文書作成時の注意点、指導案・日誌の書き方などについて指導した。2年次前期は保育実習Ⅰ(保育所)の事後指導としての振り返りを行い、それを踏まえて、保育実習Ⅱに向けての指導案・日誌の指導、模擬保育を行った。2年次後期は保育実習Ⅱの振り返りを丁寧に行い、また、1・2年合同授業にて2年生が1年生を指導する機会を持った。これらを通し、改めて実習の意味を実感し、保育者となることへの自覚を促すことができたと考える。

また、COVID-19感染予防対策として、体調の記録のほかに、アルバイトや不特定多数の人が集まる行事への参加は実習2週間前から禁止し、実習においては実習初日の朝に抗原検査を全員が実施するなどの対策を行った。ほとんどの実習施設から協力が得られ、おおむね予定通りに実習を終えることができた。

1. 実習先 保育実習Ⅰ(保育所)・・・大分県内 115件 県外 5件  
保育実習Ⅱ・・・大分県内 108件 県外 5件
2. 実習期間 保育実習Ⅰ(保育所)・・・令和3年2月8日~22日  
保育実習Ⅱ 1期・・・令和3年8月17日~30日  
2期・・・令和3年9月3日~9月16日

### 3. 保育所実習の意義・目的

- 1 子どもと直接かかわることにより、気持ちや心身の発達について理解する。
- 2 保育所の一員として活動することにより、保育所の役割や保育士の職務について理解する。

### 4. 保育所実習の様子

○COVID-19対策として体調に不調がある場合は必ず休むように指導したが、体調管理を徹底したため、例年よりも欠席が少なくなっていた。

○原則として1年次と2年次に同じ実習先に行くため、学生の成長を認めていただけている。

○学生は、0歳から6歳までの子どもたちとの関わりを通して、年齢による発達の違いを目の当たりにし、発達過程の理解と発達に応じた保育の必要性を実感している。

5. 2年間にわたる保育所実習指導を通して見えてくる学生の変容から、実習体験の影響力と実習後の振り返りの意義を痛感している。学生の保育職へのモチベーションや保育の質をさらに高めるため、指導体制の改善に努めるとともに、実習施設と養成校との協働体制の強化にも努めていきたい。

## 『異年齢児で関わること』

初等教育科2年 Bクラス 江藤 美紀

私は今回の実習で子どもの援助の仕方や子ども同士の関わりの中での育ちなど、沢山のことを学びました。その中で、私は特に異年齢で関わることの意義や重要性を学びました。

実習の中で、3、4、5歳児で、「お店屋さんごっこの製作」を行う様子を見たり、援助をしたりしました。お店屋さんごっこの製作とは、綿あめ屋さんや、ジュース屋さん、おもちゃ屋さんなど、自分がしたいに分野に分かれて、子どもと保育者で話し合いを深めながらお店屋さんをつくっていくという活動でした。この活動は子ども主体の活動で、子どもが何をしたいのか、どのようなお店屋さんしたいのか、意見を出し合い、子ども達でつくり上げていました。その中で、私は綿あめグループの製作の様子を実習期間中に観察をしました。綿あめグループは、3歳児3人、4歳児3人、5歳児2人で製作をして、割り箸と綿で綿あめを作り、段ボールを使ってお店や看板、メニューを作っていました。毎回活動の最後に今日作ったものを確認し、次の活動で何をつくりたいのか、お店には何が必要なのかを子どもと保育者で話し合っていました。そうすることで、次の活動で何を作るのか明確になり、作業を始めやすくなりました。

このような活動で、私が異年齢で関わることの重要性を感じたことは3つありました。

1つ目は、友達同士で補い合うことが出来る点です。異年齢で一つの製作をすることで、3歳児が出来ない作業を5歳児が補ったり、最近の活動で出来るようになった作業を、得意な子どもが発揮することが出来たりと、異年齢で活動することでしか体験できないことは沢山あると感じました。綿あめグループの活動の中で、看板を製作するとき、周りに3歳児が折り紙な

ど、切った紙をのりで張り付け、4歳児が絵を描き、5歳児がメニューなどの字を書いていた姿から、クラス内では体験できないことも、異年齢では、できることの範囲が広がるので、その分、達成感もより感じる事ができるのではないかと思います。

2つ目は、子ども同士で学びの機会が増えることです。異年齢で関わることで、異年齢の子どもに刺激を受けたり、学びがあったりするので、とても良い経験になる活動だと思いました。綿あめグループの活動の中で、綿にクレヨンで色を付ける作業の時、3歳児の子どもが色を付けるのに苦戦していると、5歳児の子どもが、「綿にぐりぐりすると色が沢山付くよ」と、アドバイスをする姿がありました。このような姿から、異年齢で活動をすると、教え合ったり、異年齢の子どもを見て真似をしたりと、学びが深まり、育ちに繋がっていました。

3つ目は、異年齢との関わりを通して、交流を深めることが出来ることです。私の行った実習園では基本的に同年齢で保育をするので、異年齢の子どもで関わるのは戸外遊びの時だったので、このように、異年齢で活動をすることで、同年齢の子どもだけでなく、様々な年齢の子どもと関わる事が出来、子どもにとっての交流の場になると感じました。そうすることで、沢山の人と関わる機会になるし、とても良い活動だと思いました。

このような活動を子どもと一緒に経験をして、異年齢で活動することは、様々な視点から目を配って見守る必要があるが、子どもの学びにつながったり、刺激を受けたりすることが出来る貴重な体験になると、実習を通してとても感じました。今回の実習で学んだ異年齢で関わることの重要さや大切さをこれからもしっかりと学び、今後就職した時に、自分が活動を提案するときは、異年齢で活動できる機会をつくっていきたいと思いました。

## 『時代に合った保育』



初等教育科2年 Aクラス 北野 愛優

保育所実習では数えきれないほどの学びをすることができました。私たちが受けてきた保育とは大きく違い驚くことも多くありました。また、私の実習園ではモンテッソーリ教育が導入されており、新たな保育実践を目にし、実際に触れることで保育の幅をより広げることができました。

2度の保育所実習で特に印象に残っていることが3つあります。1つ目は、保育者が援助しすぎないということです。子どもの成長を考えるとこのことが最大限の支援だと感じます。援助しないということではなく、子どものできないことをできるようにするため、支援を最小限にすることがとても大切だと学びました。実際に1歳児の子どもが上着のファスナーを止めようとしていましたが、苦戦していると感じると保育者がその子どもの側に行き、「ここをもってみて」や「先生がやってみるから見てね」というような言葉かけをしている様子が見られました。この場面を目にし、保育者が全てをしてあげることが子どものためではないということに気付きました。子どもの「できた」を一つでも増やすことで更なる成長へつながっていくのだと感じました。

2つ目は子ども同士の関わりです。私の実習園では縦割り保育がされており、異年齢同士の子どもの関わりを見ることができました。年齢など関係なく仲良く遊ぶ様子が見られました。机の片づけや掃除の際に困っている子どもがいると5歳児の子どもがアドバイスをしあげたり手伝ってあげたりしていました。机を片付ける時に机が重たくて持ち上げられない3歳児の子どもに5歳児の子どもが「下から持ち上げて」と声をかけていました。するとスムーズに片付けることができている3歳児の子どもは嬉しそ

うな表情をしていました。また、5歳児の子どもも満足そうな表情をしていました。このように子どもにとって年上のお兄ちゃんやお姉ちゃんは憧れの存在であるため、与える影響も大きいと感じます。そのため、同じ空間で生活することで互いの刺激となり互いの成長に影響を与えているとわかりました。

3つ目は、個に応じた保育です。3・4・5歳児になると自分でできることが多くなる反面、個人差も大きくあると感じました。自分のことを自分でできる子どもとそうでない子ども、みんなと同じ行動ができる子どもとそうでない子どもなど様々な子どもがいました。みんなが運動会の練習をしている中、一人で遊具で遊んでいる子どもがいました。それでも保育者は怒ったりせずに、「今日少し、練習してみない?」、「先生と一緒に太鼓叩いてみない?」などと優しく言葉かけをしていました。子どもの思いを無視するのではなく、子どもの気持ちを尊重して関わっていました。子どもが少しでも練習に参加したいと思えるような言葉かけがとても大切だと感じました。

私は2度の保育所実習で今の保育現場で欠かせないことについて学ぶことができたと思います。私たちが保育園に通っていた時とは保育観や子ども観が大きく変わっているため、現代に合った保育を展開することの意味や必要性を改めて実感することができました。これからも社会の変化に伴い、保育は進化を遂げていくと思うので日々保育者は学び続け、目の前の子どものために新たな保育を実践していくことが必要だと感じました。

## 『保育所実習の学びの軌跡』

初等教育科2年 Cクラス 城戸 愛

私が保育所実習で学んだ事は、三つあります。

一つ目は、発達年齢に合った援助です。私はこれまでに小さい子どもたちと関わる機会が少なく子どもたちに対してどのような援助があるのか全く分かりませんでした。しかし、保育実習を通して保育者の子どもたちへの援助を学ぶことができました。各年齢で発達の目安がある中で、発達の目安に達していない子どもに対して、「なんでできないの」「他の子はできてるよ」などと他の子とその子を比較するのではなく、その子の発達に応じた援助をしていました。特に印象に残ったのは、焦るような声掛けではなく、その子が自立してできるよう前向きな声掛けをしていました。前向きな声掛けをすることで、子どもたちも前向きに取り組もうと努力をする姿が見られました。

二つ目は、異年齢保育についての学びです。異年齢保育は、3歳児、4歳児、5歳児の各年齢の子どもたちが入り混じることで、子どもたちがお互いに助け合い、刺激し合いながら毎日を楽しんで過ごしていました。実習中には、年長児が年少児を助ける場面を多く見ることができ、保育者側からの関わりと子ども同士での関わりで違いがあることを学びました。例えば、何かしてほしい時は保育者が「○○しようね」と声掛けをして終わることが多いのですが、子ども同士になると年長児が年少児のお世話を最後まで付き添ってあげることが多くみられました。どうしても保育者が1人の子どもに対して割ける時間には限りがあるので子ども同士での関わりからお互いが学び成長していけることは多いと感じました。もちろん、保育者からの援助で子どもたちの学びになることは多いです。しかし、子ども同士で助け合い学び合いをしているとおのずと「助け合いの心」や「相手を思

いやる」等の人間としての基盤が培われていく姿を見ることができ、私自身も学びというのは保育者や大人からだけではないことを学ぶことができました。

三つ目は、子どもの食についてです。子どもたちは、偏食の子が多いと感じました。野菜を食べない子、あまり量が食べられない子などと様々な食歴を持っている子が多数いました。特に、年少になればなるほど偏食の傾向は強くなっていました。一日中、活発的に過ごしている子どもたちがこれぐらいの量で足りているのかと心配になりました。しかし、あまり食べられない子に対して「これぐらい食べようね」とノルマを決めてしまうと、その子にとってはとてもストレスになり食事が楽しくない時間になるので、強制することはできないと思いました。年長児になれば食べられるようになると考えていましたが、「食べられる」ようにするためには、保育者の子どもに対しての援助が必要不可欠だと学びました。様々な食歴を持つ子どもたちに対しての保育者の援助としては、①まず、食べきれる量をつぐ。②子どもの意志を尊重する(嫌いな物でも挑戦したいという気持ちがあるのなら挑戦を促すなど) ③子どもの成長を褒める。まずは、子どもたちに「食べたい」と思ってもらうことが大事だと思うので、私も保育者の援助を真似しながら「おいしそうだね」「今日は、好きなものだね」などと前向きな言葉かけをして食事に興味を持ってもらえるように工夫しました。また、嫌いな食べ物で中々食べようとしない子には、少しずつ食べる量をスプーンですくってお皿において置くことで、次の目標が明確になり嫌いな物でも食べてくれました。

以上で私が2年間の実習で学んでことになりました。常に「向上心」を持ち実習に挑んだことにより、保育者から様々な事を学び、指導を受けたことで、自分の保育の質を更に磨き上げることができました。

## 『私が目指した素敵な職業』

初等教育科2年 Cクラス 佐藤 佳奈

私が保育所実習を通して学んだことは大きく分けて2つあります。

1つ目は、子どもたちから学んだことについてです。私は1年生の時と同じ園に行かせていただき、約半年ぶりに子どもたちと再会することができた時、一人一人の成長ぶりにとても驚かされました。例えば、自分の想いを言葉で伝えることができるようになっていく姿や、はさみの使い方・箸の使い方等が上手になっている姿、気持ちの切り替えがうまくなっている姿等が見られました。さらに運動会に向けての練習の中でも「跳び箱を5段跳ぶ」というような目標を持って挑戦し続ける強さを見せてくれたり、一生懸命に保育者の話を聞き、楽しみながらも練習に取り組む姿を見せてくれたりと、毎日成長し続ける姿から、子どもたちの可能性・成長の素晴らしさ等身をもって学ぶことができました。

ですが、それと同時に「私自身も何か毎日成長できているのだろうか」「自分自身の目標ってなんだろう」と子どもたちの姿が、自分自身を見つめ直すきっかけをくれたように思います。

私も子どもたちの姿から学んだように、何か一つでも毎日の中で成長していきたいし、挑戦し続ける強さ・どんなことにも興味をもつ素直な心をもってこれから過ごしていきたいと思いました。

2つ目は、半日保育を通して学んだことについてです。主に4・5歳児の午前中の流れを任せいただき、その中で製作の設定保育もさせていただきました。そこで私は「細かい配慮の重要性」を学びました。

例えば、導入の読み聞かせの中でも絵本の内容もふまえて、世界観を大切に読むときと子ど

もたちとのコミュニケーションを大切にするときというような工夫をしたり、クイズの中でも盛り上りを考える時間のように、メリハリを大切にしながら子どもの興味を引き付ける工夫をしたりしていました。また異年齢で取り組む活動であったため、お互いに関わり合える環境構成の工夫や、作るだけではなく出来上がった作品を音楽に繋げ、新たな展開を作り出してあげる工夫等、様々な配慮を先生方から学ぶことができ、保育者の配慮一つでこんなにも子どもたちの活動が豊かになるのだなと感じました。

さらに、先生方も、運動会製作や日頃の保育の中でも何度もコミュニケーションをとっている姿を見て、保育者全員で作上げる保育の素晴らしさを感じたし、私が保育者になった時も自分の意見を持ちながらも他の先生方の新たな視点を素直に生かし、自分の保育に囚われすぎない保育者になりたいなとも思いました。

最後に、私は保育所実習を通して私が目指した「保育」という道は間違っていなかったなと改めて感じることができました。実習担当の先生も「毎日目標をもってお仕事ができる素敵な職業」とおっしゃっていて、これから私自身も大変なことにたくさん出会っていくと思うけれど、毎日子どもたちに刺激をもらいながら、学び続けられる最高の職業に出会ってしまったなとも思いました。これからもこの実習を通して学んだことを生かしながら、保育と関わっていきたいと思います。

## 『子どもの思いを大切に！』

初等教育科2年 Dクラス 高橋 悠莉

1年生の実習では、0、1、2歳児のクラスに入ったのですが、0歳児は会話が難しく、自分でできることも少ないので保育者がほとんどのことをしてあげますが、1歳児では自分で手を拭いたり、自分で食べたりする子がいました。全てのことを保育者がやってあげるのではなく、手伝ってあげる所と自分でやらせて成長させてあげる所の区別をし、より成長して様々なことができるように関わるのが大切だと学びました。

2年生の実習では、3、4、5歳児のクラスに入ったのですが、おもちゃの取り合いのいざこざの際、3歳児クラスでは、保育者が間に入り、おもちゃを取った子には「使いたかったんだよね、〇〇ちゃんが先に使ってたからあとで貸してもらおうね」と言い、おもちゃを取られた子には「びっくりしたね、〇〇ちゃんも使いたいみたいだから後で貸してあげようね」と言い、両方の気持ちに寄り添ってお互いが仲良く遊べるように仲立ちをしていました。4、5歳児のおもちゃのいざこざの際には、保育者がすぐに仲立ちに入るのではなく、手が出て危ないようであれば止めに行き、基本的には子どもたちの様子を見守り、子ども自身で解決できるように関わっていました。年齢に合わせて自分の思いを上手く伝え、相手の気持ちを理解できるようにし、自分たちで「なんとかしよう」と思い、自分の口で言いたいことが表現できるように関わっていくのが大切だと学びました。

実習を通して、子どもの気持ちを読み取って関わるのが大きな課題になりました。子ども同士がおもちゃの取り合いで喧嘩をする場面が多く見られました。私は、「順番に使おうね」や「先生と一緒に50数えたら〇〇くんに渡そうね」と言葉掛けをしましたが、不満そうな顔を

し、「貸したくない」と言われました。保育者の方に相談すると、「子どもは今時計に夢中になっている時期だから、5の針になったら〇〇くんに渡そうね」と言い、身の回りの環境を上手く使うことが大切だとアドバイスをもらいました。いざこざを解決しようと思うだけではなく、どうしたら解決できるかを子どもの立場に立って考え、身の回りの物や子どもが興味を持っている物を活用していくことも大切だと学びました。また、子どもの機嫌や状況によっておもちゃを優しく貸す日もあれば、貸さない日もあったので、子どもの様子を見て、思いに寄り添ってどのような言葉掛けをしたら良いのかを考えていきたいと思います。

4、5歳児では、設定保育をし、折り紙やのり、クレヨンを使って花火でんでん太鼓を作りました。特別な配慮を必要とする子がおり、保育者の方から「この子は製作をするのが難しい」と言われましたが、でんでん太鼓の音に興味を持ち、楽しんでいる姿を見て嬉しかったです。活動に参加しにくく、興味を持ちにくい子どもがいた場合は、どのような活動を展開したら興味を持ってくれるのかを考え、全員が楽しめるようにすることが大切だと学びました。

実習を通して、子どもと関わる時は、安全を第一に考え、命を大切にする事の重要性を改めて感じました。例えば、雨の次の日に園庭で遊ぶ時は遊具が濡れたり、壊れたりしていないか見たり、保育室では靴下を脱ぐようにして滑って怪我をしないようにし、安全な環境を保育者が作っていくのが大切だと学びました。

4月からは保育士として働くので、子どもや保護者の一人ひとりの性格に合わせて気持ちに寄り添い、子どもや保護者から「この先生が好き」や「この先生が担任で良かった」と信頼してもらえる保育者になりたいと思います。